

高等学校の部 最優秀賞

「8時15分 ヒロシマで生きぬいて許す心」を読んで

広島県立呉三津田高等学校 1年
福田真太郎（ふくだ しんたろう）

小学校時代、広島平和記念資料館を初めて訪れたとき、私の心に一番うかんだ言葉は「許せん」という言葉です。ところが題名には「8時15分ヒロシマで生きぬいて許す心」とありました。世界で初めて、原子爆弾が広島上空で炸裂し、多くの人々の人生そして生活、時間がその一発によって一瞬にして消えてしまいました。1945年8月6日のことです。今も放射能の影響により死を迎えている人々。この現実をなぜ、どうして、許すことができるのか、知りたくて読みました。

被爆直前の朝、親子でとる朝食。戦時中のことで、今の私たちの生活からすると満足とはいえない食事。その後に語られる悲しみ、混乱、苦しみを知ると、とても幸せなひとときと思えます。今テレビ番組などで老人の方に戦時中の体験を聞いている番組などがあります。それを見ると、とても話すことが、そして思い出すことがいやなはずだと思います。それなのに話してくださる老人の方たちは戦争について今の若い人達にわかってほしいという思いで話して下さっていると思います。その話を聞くと、「地獄のようだった。といっても実際にみたものしかわからん。」という話をよく聞きます。忘れることはできないが、思い出したくないことなのだろうと感じました。それなのに美甘さんはすごいと思いました。読みながら、経験された様々な出来事、抱いた迷いや不安を考えました。毎日が「綱渡り」のように一步一步不安で怖かったことでしょう。この「綱渡り」を経験せずにすめばよいのと思ったことがあるかもしれません。でもそういうわけにはいきません。美甘さんには親子の愛、他者への思いやり、勇気、誠実さがありました。地元への愛というのは自分も強く共感しました。育った場所の建物、風景などはいつでも思い出すことができます。そのため悲しみも大きいものだったと思います。

父親である福一さんから伝えられた親子の愛があったからこそ、健康上の長引く問題があり、閉じ込められ、自由が奪われたように孤独に感じる時も生きぬくことができたのだと思いました。福一さんが物事を冷静に考えることによって感情が理性をくもらせやすく、判断力をにぶらせることになくなったと思います。僕もよく理解することができました。僕の家は特別ではないけれど、いつもなぜかぬくもりがあり、誰よりもさきに僕の身を心配してくれます。積極的であり、どんな状況でも喜びや希望を福一さんはみだし、そのうしろ姿は何よりも生きる勇気になったと思います。戦争で悪となった兵士の残酷な仕打ち、この時も進示さんにりっぱな背中をみせています。怒りや悲しみに圧倒されることと、他の人からは不当なことをされた時に生まれる悪い心の対するのは簡単ではなく、たやすいものではありません。心を失う人もいるし、怒りを制御しないで後悔することもあります。いやなことをされた時に、どのように自分の気持ちを処理できるでしょう。福一さんは教えてくれました。まず状況をしっかりと分析し、自分の中で考えて、「危害に対する危害」を返すなか、事が悪くなるだけであることを忘れず、状況を考慮し、憤りを捨てることにより、怒りにより振り回されないようにすることです。そして内面に目を向け共感すること。これは難しいことです。なぜなら人は自分の見たいところだけに目を向ける傾向があるからです。十分に時間をかけ見る人になりたい。そのためには努力が求められます。津波がくるとわかっていて逃げませんか。もちろん逃げます。それと同様にうまくすれば良くなり、悪くすれば外になります。人の心ほどうまく操れないものはないと思います。

「知恵」や「理解」には単に善悪を見わけることが必要です。以上のことが関係しています。広い視野に立ってみる必要があると思います。具体的なものも必要です。戦時中の教育について福一さんが言われたことは本当だと思います。相手のことを知らずに勝てるわけがな

いということです。知識があれば不安を和らげることができます。知らないということは目を隠して何があるかわからないところにふみこむことだと思います。